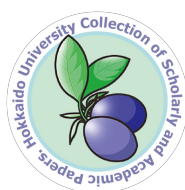




HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	フッサール『算術の哲学』における数と時間との関係
Author(s)	深尾, 紘平
Citation	研究論集, 25, 35 (左) -46 (左)
Issue Date	2026-01-16
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgshhs.25.l35
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98761
Type	departmental bulletin paper
File Information	05_rjgshhs_25_p035-046_l.pdf



フッサール『算術の哲学』における数と時間との関係

深 尾 絃 平

要 旨

本論文は、フッサールの初期の著作である『算術の哲学』（以下『算哲』）において論じられている数と時間との関係を、現象学的枠組みから明らかにすることを目的とする。第一に、『算哲』で行われている数の本来的表象についての議論を整理する。第二に、数の本来的表象に時間がどのように関わりとされているかを、『算哲』に即して詳説する。第三に、『算哲』における時間についての議論が、『内的時間意識の現象学』以降の現象学的時間論の枠組みで捉えられるかを検討する。『算哲』は現象学が打ち立てられたとされる『論理学研究』以前の著作であるため、通常現象学的であるとみなされない。しかし本論文では、『算哲』における時間についての議論に、のちの現象学的時間論と通ずる点があることを示す。このように現象学的な枠組みで『算哲』の時間についての議論を捉えることは、そこで関連づけられている数と時間との関係を、現象学の立場から扱うことにもつながると言える。

導入

数も時間も、われわれの日常生活において頻繁に考えられている。これらは分けて考えられることもあるが、他方関連づけられることもある。時間について言うと、われわれはそれを日常において捉えようとするとき、数を用いて計ることがある。時計や暦における数の使用がその例である。また逆に数について考えるとき、ある数を時間的な順序をあらわす数として捉えることがある。例えば徒競走における順位を示す数が考えられる¹。しかしこれらのことから

¹ この例は、時間の順序的な側面を数であらわしていることから、時間を数で示しているとも捉えられる。時間的前後の関係が捨象された数をわれわれが用いることも事実であることから、ここではそのような数も念頭に置きつつ、この例を挙げている。

直ちに、時間が数に、または数が時間に還元されるとは言い難い。例えば数えられたものの個数は、それらの数えられたものの時間的前後に関わらずその個数であるし、また逆に、時間の経過は、「昔から今まで」のようなかたちで、数を用いずとも捉えることができるからである。フッサールの初期の著作である『算術の哲学』²は、以上の、少し考えただけでは明らかではない数と時間との関係を扱っている。また、フッサールがそこで（主に当時のフッサールにとって過去の）哲学者や数学者によるこの関係についての学説を取り上げていることから、数と時間との関係は『算哲』以外でも取り上げられてきた題目であると言える。

このように数と時間との関係は、日常的に考えられているのみならず、哲学的に扱われてきた題目でもある。このことから、『算哲』を当の関係についての哲学的議論の系譜に位置づけ、その特徴を明らかにすることは可能である。一方、『算哲』が書かれた年代からして、この著作における数と時間との関係についての議論は、現象学の立場からなされたものと直ちにみなすことは難しい。すなわち、現象学がそこで初めて打ち立てられたとされる『論理学研究』以前の著作であることから、『算哲』における数と時間との関係についての議論は、フッサール自身が現象学という体系を明示して行ったものではなく、ゆえに、完全に現象学的であるとは言い難い³。しかし、『算哲』における数と時間との関係についての議論の過程では、『内的時間意識の現象学』⁴以降で扱われる現象学的時間論と通ずる内容が議論されている。そのため、『算哲』を現象学的な枠組みの中で捉えることは十分可能である。さらに、このように現象学的な枠組みにおいて『算哲』の時間についての議論を捉えることは、そこで関連づけられている数と時間との関係をも、現象学の立場から扱うことにつながると言える。

したがって本論文は、現象学的に数と時間との関係を扱うべくして、『算哲』において考えられている数と時間との関係を明らかにすることを試みる。そのためまず第一節では、『算哲』において数の起源の探究が行われる際に扱われている概念や区別を整理する。第二節では、第一節で整理された数の起源の探究に際して、フッサールが数と時間とをどのように関連づけているかを明らかにする。第三節では、『算哲』においてフッサールが考えていた数と時間との関係

² 以下『算哲』と略記する。『算哲』からの引用箇所の直後に PA と Husserliana Bd. XII におけるページ数を記載する。本論文における直接引用の邦訳は著者によるものであり、[] 内は著者による補足である。

³ 事実、『論理学研究』において行われた心理学主義批判が『算哲』へ向けられたものであるとし、『算哲』での議論が心理学主義に陥っているとみなす立場もある。一方『形式論理学と超越論的論理学』においては、『算哲』における数についての議論が現象学的であったと、フッサール自身によって主張される。本論文では、『算哲』のどのような側面が心理学主義的であることを示すことよりむしろ、『算哲』における数と時間との関係についての探究が、どのような現象学的枠組みで捉えられるかを明らかにすることを主題とする。

⁴ 『算哲』と同様に、引用箇所の直後に ZB と Husserliana Bd. X におけるページ数を記載する。直接引用の邦訳も同様に著者によるものである。

を、現象学的時間論の枠組みをもって検討する。結論では、『算哲』における数と時間との関係についての議論が、現象学的時間論の枠組みのうち、特に同時性という関係から捉え直すことができる可能性を手短に示す。

第一節：『算術の哲学』における数の起源の探究

フッサールの『算哲』における主題の一つは、数を「本来的に表象する (eigentlich vorstellen)」とはいかなることかを示すことであると言える。ここで「本来的」とされている表象は、「非本来的な (uneigentlich)」または「記号的な (symbolisch)」表象と区別される。この区別は『算哲』全体にとって基礎的な区別であり、『算哲』の第一部は数の本来的な表象を中心に扱い、第二部が非本来的表象を主題としている。本節では以下の三つを軸に、次節で扱う数と時間との関係が議論されるところのコンテキストを整理する。第一に、数の本来的表象と非本来的表象との区別を明らかにする。次に、数が本来的に表象されときのその構造を、フッサールが用いる「多なるもの (eine Vielheit)」と「収集的結合 (kollektive Verbindung)」という二つの概念を中心に明らかにする。最後に、数の起源の探究を行うに際して、とりわけなぜ多なるものが考えられなければならないかを明らかにする。

数の本来的表象と非本来的表象との区別は、『算哲』の序盤において示されるが、そこでは区別の根拠が深掘りされず、数の本来的表象が扱われた後に区別が詳説される。しかしそこでの区別についての議論も、区別がどのようにして生じるのかということよりもむしろ、区別をすでに明らかなものとし、その区別において分けられた数のうち、非本来的に表象されているものがどのようなものであるかを扱っている。そこでの議論によれば、まず算術における数の表象はほとんど非本来的である。すなわち、「われわれが、数列のわずかな最初の数を超えて持つすべての数表象は、記号的であり、また記号的でしかありえない。このことは、算術の特徴、意味、そして目的を完全に規定する事実である」(PA 190)。ここでフッサールは、算術が非本来的であると端的に断定しているわけではない。本節において後述する、数の本来的表象がいかなるものであるかを受けて、もしそのようなかたちの表象がすべての数について可能であるならば、そもそも算術が完全に不必要になる (PA 191) が、実際算術は行われているということを念頭に置いて、本来的ではない数の表象を認めていると言える。このような『算哲』におけるこの区別にまつわる事情に即して、われわれの数の表象を考えると、ほとんどの数は本来的に表象されえない (PA 191-192)。われわれはすべての数を本来的に表象するための認知能力を備えていないからである (ebd.)。ゆえに、実際に行われている「[...] 算術全体は、ここで言及されたわれわれの知性の本質的な不完全さを乗り越えるための、技巧的な手立ての総体にほかならない」(PA 192) とされる。以上のように、事実として数の本来的表象に限界があるからこそ、また本来的表象それ自体をみることでそのことが示されているからこそ、この区別が考えられると言える。

数が非本来的に表象されており、算術もおおむねそのような数からなるという状況から、数は本来の表象なしに考えられるものであるとも言えるかもしれない。すなわち、そもそも本来の表象を考えず、したがって非本来的表象との区別も必要ではないと考えられるかもしれない。事実、例えば初等的な算術を考えるとき、単にある記号をある規則に即して操作するものとしてみなすことも可能であり、そのような記号の規則的な操作を、数を本来的に表象せずに考えることは可能であるからである。しかしフッサールはこのような関係を認めない。すなわち、非本来的に表象された数は何らかのかたちで本来的に表象された数を前提している (voraussetzen) のであって、その逆ではない (PA 16)⁵。以上のことから、非本来的表象がすでに考えられており、また事実として算術の大部分が非本来的である以上、それとは区別された本来の表象が必要であるとされる。

以上をまとめると、数の本来の表象と非本来的表象との区別は、それぞれを個別にみることで捉えられる区別であると言える。すなわち、数の本来の表象それ自体をまず考え、その限界をみるのが、かえって非本来的表象がいかなるものであるかを明らかにすることにつながる。以上のような事情のもと、まず数の本来の表象を明らかにするために、フッサールが『算哲』において取り扱うのが、「多なるもの」である。多なるものは、数えられるあらゆる対象が、「総体 (Inbegriff)」⁶として現れている際の当の総体のことである。例えばわれわれが「感情、天使、月、イタリア」の数を捉えようとするときに、「感情、天使、月、イタリア」をそれぞれ個別の何かとして捉えるのではなく、「規定された諸対象の総体」(PA 16)として、すなわち多なるものとして捉える。それぞれが個別に捉えられているだけでなく、いくつかのまとまりとして捉えられているときのそのまとまりが多なるものである。

以上のように、多なるものにおいてはそれぞれの何かがあるかたちでまとまっている。このようなまとまりにおいて成立している関係が、「収集的結合」である (PA 20)。収集的結合は、まさに多なるものを多なるものたらしめるために成立していなければならない関係であり、次節で確認されるよう、時間に還元されえないとされる。また、収集的結合は「ある新しい、すべてのほかからきっぱり分けられた関係のクラス」(PA 66)とも言われる。まとめられているそれぞれの何かにどれほど時間的な関係を認めても、そのような時間的な関係には還元されえない関係がそこに成立しているからである。より立ち入った説明をすれば、収集的結合は「単純

⁵ 本来の表象が非本来的表象の前提であることは、第一章ですでに考えられているが、この前提の関係がどのような意味での前提であるかについては、『算哲』を通して触れられていない。もし非本来的に表象された数を、本来的に表象された数とその種類から切り離して考える場合、非本来的に表象された数からなる体系において、どのような数が最も基本的であるかという問いが可能になる。必ずしも数の本来の表象を扱わない数学基礎論的な関心のもとでは、このような問いが考えられる。

⁶ 「多なるもの」は「総体」やほかの類義語とほとんど同じ意味で用いられている (PA 14 Anm.)。本論文で多なるものとほとんど同じ意味を持つものは、直接引用を除いて「多なるもの」と表記する。

な (einfach)」、「心的な (psychisch)」関係である (PA 75)。すなわち、多なるものにおける収集的結合はそれが関係づけているところのそれぞれの何かを関係づけているが、関係同士を関係づける高次の関係ではないという意味で単純であり (PA 71)、またそれぞれの何か同士の持っている性質に依拠しない関係であるという意味で心的な関係と呼ばれる (PA 73)。特に心的な関係であるという点を、旋律という例をもって考えることができる。旋律においては結びつけられている単音がそれぞれ順序的な関係にある。そのような順序的な関係にあるそれぞれの単音それぞれをみることで、単音の前後関係を捉えることはできない。このような、そこで関係づけられている何かの内容に関わらず成立している特徴が収集的結合である。次節で述べる通り、時間も必ずしも内容それ自体の規定ではない。ゆえに、収集的結合における関係は、時間と関連づけて論じられることになる。

以上が『算哲』のフッサールによる数の起源の探究において、最初に扱われる内容である。関連して、この探究においてなぜ数それ自体ではなく、多なるものがまず考えられなければならないかが明らかにされなければならない。まず多なるものが考えられなければならない理由は、第一にフッサールが基数を最も基本的な数であるとみなしていたことに由来すると言える。『算哲』の初めにフッサールは基数が最も基本的な数であるとし、議論を進めた。そこでは基数に明確な定義が与えられていたわけではないが、おおむね集合の大きさをあらわすために用いられている数であるとされていた (PA 11)。すなわち、ある集合が基数をもって示されたとき、そこで用いられている基数は集合における要素の順序をあらわしたものではないとされていた。ゆえに多なるものという、そこで捉えられているそれぞれの何かの間に必ずしも時間的な関係が設定されていないようなものが、まず考えられることになったと言える。第二に『算哲』の方向性が関係していると言える。『算哲』の目的の一つは数の起源の「心理学的特徴づけ (psychologische Charakteristik)」とされていた (PA 21)。すなわち、数というすでにわれわれが慣れ親しんだものを分析するというよりはむしろ、それがまさに数として把握される際に必要なものを明らかにすることが、ここで目的とされていた。したがって『算哲』においては、まず個々の数があらかじめ与えられており、それらからの抽象で多性が考えられるという方向ではなく、むしろ数概念や多であることのもととなるような具体的な現象が与えられており、そこからより詳しく規定された多なるものとして、数が得られるという方向で議論が進められていた。このような『算哲』の方向が、まず多なるものという具体的な現象を扱うことを必要にしたと言える。

第二節：『算術の哲学』における数と時間との関係

前節では、『算哲』の主題の一つである数の起源についての探究において中心的な、数の本来の表象を扱った。非本来のそれと区別されるかたちで数が本来的に表象されるということは、そこで具体的な現象としての多なるものが、収集的結合という関係のもとで成立している

ということであった。また数の起源の探究に際して、多なるものがまず考えられなければならない理由を確認した。多なるものがまず考えられなければならない理由は、『算哲』において数が多なるものの限定であるということがあらかじめ考えられていたからである。これらの内容に加えてフッサールが『算哲』において行う議論は、数（あるいは多なるもの）と時間との関係についてである⁷。そのため本節では、『算哲』における多なるものと時間との関係を明らかにする。フッサールが『算哲』において、多なるものと関連づけて論じる時間の二つの側面は、「同時性 (Gleichzeitigkeit)」または「時間的同時 (das zeitliche Zugleich)」と「継時性 (Sukzession)」または「時間的継起 (die zeitliche Aufeinanderfolge)」である。フッサールの主眼は、これらそれぞれがどのようにして多なるものと関係するかという点である。簡潔に言うと、これら二つは多なるものの現れにとって「心理学的前提条件 (psychologische Vorbedingung)」であり、また二つは異なったかたちで心理学的前提条件である。以下ではまずそれぞれと多なるものとの関わりを個別にみる。その後、同時性と継時性との心理学的前提条件としての違いを詳説する。

『算哲』第二章において同時性はまず、批判されるべき主張の中に組み込まれるかたちで扱われる。すなわち、多なるものにおいて表象されている個々の対象がそれぞれ同時であり、そのような同時性のみが多なるものを特徴づけている (PA 24) という考えが、批判される主張として扱われる。このような主張は、多なるものから得られる多性概念についても言われる。つまりこの主張にしたがうと、多なるものからの反省によって得られる多性においても、対象の同時性のみがそれを特徴づけているとされる (ebd.)。このような主張を批判するためにフッサールが取り上げるのは、ある対象が同時に表象されることと、同時であるとして表象されることとの区別である (ebd.)。換言すれば、「内容を同時に表象する (gleichzeitig vorstellen) ことは、まだ内容を同時の内容として表象する (als gleichzeitige vorstellen) ことではない」 (ebd.)。まず同時に表象することについて、いくつかの対象が同時に表象されていても、それらが異なる時間において捉えられていることがある。その一方、同時の内容として表象される対象はまさに同時であるとされる必要があるが、そのためには (同時に表象する作用とは異なった) 「かえって特別な反省が必要である」 (ebd.)。以上のことを明らかにするために、フッサールは旋律を例として持ち出す。ある旋律において、それぞれの単音が個別であり時間的に続いて現れるにも関わらず、それらがまとまりを持った旋律として表象される際、それぞれの単音は同時に表象されている (ebd.)。われわれはこの際それぞれの対象としての単音を、同時の内容として表象しなくてもよい。それぞれの単音を同時であると表象することは、旋律が旋律として現れる

⁷ この議論は、哲学史上の数と時間との関係についての立場を批判的にみるかたちで行われている。そのため、『算哲』におけるフッサールの議論が、この関係を扱った議論の系譜上でどのように位置づけられるかを考えることも可能である。本論文では、主に第三節で扱うように、哲学史上の位置づけではなく、『算哲』におけるこの議論と現象学的な枠組みとを中心的に扱う。

ことに必要ではなく、旋律といった複数の単音の総体は、同時に表象されることで総体たりうるということである。われわれが旋律を聞く際、順次現れるそれぞれの単音がもし同時に表象されていなければ、単音の連続としてすらも捉えることができない。すなわち、順次現れる単音があるまとまりをもって現れず、したがって旋律も表象されない。ここで考えられている旋律が、まさに多なるものである。ゆえに多なるものも、旋律がその複数の単音を同時に表象することで旋律たりうるように、複数の対象が同時に表象されて初めて多なるものたりうる。しかし、複数の対象が同時に表象されるだけでは、多なるものは成立しない。この同時性という現れの条件が満たされたうえで、ある心的作用が成立することで、多なるものは初めてそれを特徴づける集合的結合を持つに至る。以上が同時性と多なるものとの関わりである。

多なるものと同時性との関係について、同時に捉えられる対象の数の限界もフッサールによって示されている（PA 26）。すなわち、多なるものの対象の数は膨大になりがたい。われわれは最大の注意を向けたとき、ある一つのものへしか注意できないが、注意していなくとも、同時に捉えられる対象は限定されている（ebd.）。例えば、無限に続く自然数のすべてを同時に把握することはできない。しかし（下記で詳説する最も限定されたかたちでの対象の継時的な現れのように）「ある同一の瞬間において、一つより多くの内容に決して関わるることができないということは、真実ではない」（ebd.）。もしわれわれが瞬間において一つの対象しか捉えられない場合、もっとも単純な関係にすら気づくことができない。なぜなら、一つの項が意識で捉えられているときもう一つの項はその意識において捉えられていないからである。しかしわれわれは関係について考えることも、例えば二つの点を同時に表象することも可能である。ゆえに、同時に捉えられる対象の数には限界があるが、必ずしもそれが一つになるわけではない。

多なるものと継時性との関わりは、上述の同時性についての議論に続くかたちで議論される。フッサールは継時性についても、同時性の場合と同様に批判の対象となる主張をまとめる。そのような主張によれば、「われわれの思考の散漫な性質ゆえに、いくつかのお互いに異なった内容は全く同時に考えられない。われわれの意識はそれぞれの瞬間において一つの対象にのみ関わりうる」（PA 25）。そしてこのことに加えて、多なるものにおけるそれぞれの対象が継時的であることが、多なるものを多なるものたらしめている（PA 25-26）。以上が、フッサールが批判の対象とする主張である。同時性の場合と同様に、この主張においては多なるものから得られる多性においても、継時性の特徴であると考えられている。この主張に対して、フッサールは「心理学的、論理的誤り（psychologische und logische Irrtümer）」を指摘する。ここで言及される心理学的誤りとは、同時に捉えられるものの数と関係している。言い換えると、フッサールが批判する主張は、同時に表象することができる対象の数を極端に少なくとっている。すなわち先述の通り、ある現象において一つの対象のみが与えられているとしているため、そもそも対象同士の関係すら成立しえない（PA 26）。このことはわれわれが対象同士の関係について語りうることと「明らかに（evident）」矛盾している。次いで論理的誤りとは、継時的に対象

が現れるという心理学的な側面を、対象である多なるものにおいて成立している個々の対象同士の関係であるとする点である。確かに多なるものでは（次の段落で言われているように）ほとんどの場合、それぞれの対象が継時的に現れているが、それは現れの構造であって、多なるものにおいて成立している関係ではない。

以上の二つが、継時性を多なるものにおいて成立している関係であるとする主張の、心理学的、論理的誤りである。以上のようにフッサールは、多なるものを特徴づける関係は継時性であるという主張を退ける。しかし、継時性が多なるものとまったく無関係であるとするわけではない。むしろ以下の引用の通り、同時性も含めて、多なるものとの関わりを明示する。

「したがってわれわれは、時間がわれわれの〔多性〕概念にとって心理学的前提条件としての役割のみを果たすことに気がつく。そしてその役割は二重の仕方である。

(1) 多なるものや基数の表象において統一されている部分的表象が、われわれの意識に同時にあることは不可欠である。

(2) ほとんどすべての多性表象といずれにせよすべての数表象はプロセスの成果であり、要素からなる継時的に発生した全体である。そうである限りそれぞれの要素自体はあることとなった時間的規定を持つ」(PA 32)。

ここでは継時性と同時性の両方が心理学的前提条件であるとされ、どちらも多なるものが現れる際に、その現れの構造として成立していなければならないものとして扱われる。そのため、それぞれに多なるものを多なるものたらしめるという特徴が付与されることはなくとも、依然として成立していなければならない現れの構造として、多なるものと関連づけられる。以上のかたちで、同時性と継時性はそれぞれ多なるものの現れにとって心理学的前提条件であるとされる。しかしこれらは、全く同じかたちで心理学的前提条件たるわけではない。フッサール自身がそれぞれについての議論をまとめる際に、継時性のみ特定の限定詞 (fast alle) を用いていることから、このことが確認される。一方で、同時性においては、それぞれの対象が同時に表象されていることは不可欠 (unerlässlich) である。すなわち、それぞれの対象が違う時間に与えられていようと、それらが多なるもののうちの一つであると表象されるためには、対象は同時に表象されていなければならない。他方、継時性においては以下のような限定がある。すなわち、「ほとんどすべての (fast alle)」多なるものの表象が、継時的なプロセスの成果である。継時性はこの「ほとんどすべての」である点において、同時性と異なる。この点は、上記引用箇所の直前で説明されていると考えられる。その箇所によれば、同時性と継時性が異なるのは、二つのものや三つのものからなる多なるものにおいては、それらにおいて表象されている個々の対象が継時的に現れていない場合があるからである (PA 27)。例えば目の前の紙に書いた二つの点を表象する際に、適切な距離でそれらを見ると、それらの点を、どちらか一方を先に、もう一方を後にといった継時的なかたちではなく、両方を同時に見ることができる。すなわち、対象の数 (フッサールによれば二つか三つ) を含めた適切な条件がそろっている場合において

は、そもそも多なるもののそれぞれの対象が継時的に表象される必要がない。ゆえに、継時性が心理学的前提条件たりうる場合は限定されている。この点が同時性との違いである。

以上が継時性と同時性との、多なるものへの関係である。『算哲』においては、多なるものにおけるそれぞれの対象が継時的であるかそうではないかに関わらず、少なくともあるかたちでの同時性が必ず成立していなければならないことが示されていたと言える。

第三節：数と時間との関係

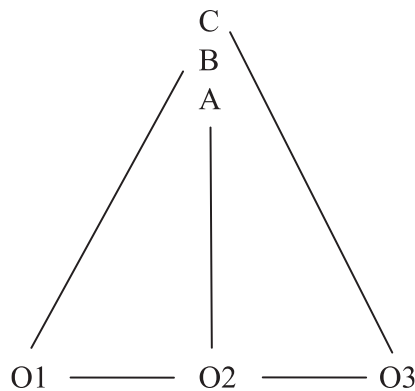
フッサールが『算哲』において、数と時間との関係を明らかにする過程で強調している点は、同時性という時間の一側面が、多なるものの現れにとって成立していなければならない条件であるということである。しかし、同時性は多なるものを捉えるにあたって必要ではあるが、それだけでは多なるものにおける関係を特徴づけられないという主張が、『算哲』においてなされていた。つまり『算哲』では、同時性は多なるものとの関わりに限って議論されている。一方『内的時間意識の現象学』以降の現象学的時間論でも、同時性についての議論が行われている。本節では現象学的時間論の枠組みで、『算哲』における同時性についての議論が捉えられることを示す。

前節で明らかになった通り、『算哲』におけるフッサールの同時性についての議論によれば、多なるものは同時性によって可能になるが、それは多なるものにおけるそれぞれが同時であるという意味での同時性ではなかった（PA 24）。つまり、ここで考えられている同時性は、多なるものにおけるそれぞれの対象が同じ時間的規定を持つと捉えられていることではなく、単に同時に現れていることである⁸。また、多なるものにおけるそれぞれの何かが順番に、まず A そして B というかたちで現れていようがいまいが、それらがまとめて多なるものとして捉えられるためには、〈同時〉に現れている必要がある。ここではすでに、対象が継時的であることが矛盾しないと考えられている。つまり、多なるものが現れている際に、それぞれの対象が互いに前後するという規定を持っている際、多なるもののうちの一つとして捉えられている限り、それらはすべて〈同時〉に捉えられている。多なるものにおけるそれぞれの何かが継時的な規定を持ち、それらが一つ目の対象、二つ目の対象といったように捉えられていても、それらが多なるものという統一において現れている限りでは、〈同時〉に現れているということである。

このような、継時性と必ずしも矛盾しないような〈同時性〉が『算哲』において考えられていた。一方『内的時間意識の現象学』においては、「時間的客体（Zeitobjekt）」として旋律が引き合いに出される（ZB 23）。『算哲』において、〈同時〉に表象することといくつかの対象が同時

⁸ 以下ではこのような意味での、あるかたちで同時に現れていることを〈同時性〉と呼び、通常継時的であること相容れないとされる同時性と区別し、議論を進める。〈同時〉の場合も同様の区別を用いる。

であることの違いを説明する途中で持ち出された旋律の例（PA 24）が、明確に時間的客体として示され、そこでは「単に時間においてある統一であるだけでなく、時間的延長をそれ自体に含んだ客体」（ZB 23）という特徴づけがなされる。そこでも『算哲』における旋律の扱いと同様に、それぞれの単音が時間的に前後しつつも、旋律というまとまりの中で捉えられる際に、〈同時〉に捉えられていることが示されている。ここでは〈同時〉に対象を捉えるということについて、それが対象の時間的な前後と矛盾するわけではないことが考えられていたと言える。以上の時間の構造を、『時間構成についての後期テキスト：C 草稿』⁹をもとにしたザハヴィの図¹⁰にしたがって示すと、『算哲』でも以下と同様の時間の構造が考えられていたと言える。



この図のもととなる『C 草稿』において、同時性は以下のように規定されている。

「流れることの原現象には、同時において私が、今、たった今、ちょうどこれからを分けていることと、この同時の存立は、具体的で現象的な現在と呼ばれる、流れる統一であるということが含まれている」（Hua Mat. VIII 27）。

手短かに説明を加えると、今である A において O2 が捉えられつつ、たった今の B において O1 が捉えられ、ちょうどこれからである C において O3 が捉えられている。また、A, B, C はそれぞれ今、たった今、ちょうどこれからとして区別されつつも、〈同時〉を成している。すなわち、それぞれにおいて別々の O が捉えられつつも、O が一つ目、二つ目、三つ目といったかたちで関係づけられている以上、A, B, C はそれぞれのうちにそれぞれで捉えられているものを含みあっており、ゆえに O 同士の関係を捉えることができる。つまり、もし A, B, C のそれぞれが O のそれぞれと単独に関わっている場合、例えば A においては O1 のみが捉えられること

⁹ 以下『C 草稿』と略記し、引用箇所の直後に Hua Mat. VIII と Husserliana Bd. VIII におけるページ数とを記載する。直接引用の邦訳は著者によるものである。

¹⁰ Zahavi, Dan. Husserl's phenomenology. Stanford, Calif: Stanford University Press, 2003, p. 84.

となり、したがって、それに続く O2 がそもそも O1 との関係において捉えることが不可能になる。以上の、A, B, C のお互いの内容をお互いにおいて含みあうという時間の構造が、『算哲』においても考えられていた〈同時性〉である。

『算哲』の多なるものについての経験に即して考えると、多なるものにおけるそれぞれの対象に、旋律のそれぞれの単音におけるような時間的前後関係がある場合、今、たった今、ちょうどこれからからなる同時において、継時的な対象から成る多なるものにおけるそれぞれの対象が〈同時〉に捉えられている。それぞれの対象が時間的な前後関係を持っていることは、図の O1, O2, O3 に相当する。それぞれの対象が時間的な前後をそのうちに持っていることは、それらが〈同時〉に捉えられていることと矛盾せず、多なるものを捉える際にはむしろそれが成立していなければならない条件である。以上のように『算哲』ではすでに、それぞれの対象が時間的前後をそれらの規定として持っていることと、それらが〈同時〉に捉えられていることが両立可能であることが示されていた。『内的時間意識の現象学』以降の現象学的時間論の枠組みでも、このような〈同時性〉の議論が維持されていたと言える。

結論

本論文では『算哲』における数と時間とを中心的に扱った。まず『算哲』において、数が本来的に表象されている際には、収集的結合が成立していなければならないという点を確認した後、そのような収集的結合が、結合されているものの時間的な関係に還元されないとされている点を詳説した。その後、現象学的時間論の枠組みで、『算哲』における時間についての議論を捉え直した。『算哲』における多なるものの扱いではすでに、継時性と矛盾しないような〈同時性〉というものが考えられていたと言える。『算哲』においてフッサールが強調していた点は、集合的結合が時間的な関係に還元されないとするものであった。そのため、収集的結合を特別な関係として扱っていたと言える。しかし、より根本的な〈同時性〉が現象学的枠組みを介して捉え直された今、そのような〈同時性〉がどのようにして収集的結合と区別されるかを、改めて考えることが可能になる。

(ふかお こうへい・哲学倫理学研究室)

文献

- Husserl, Edmund. *Husserliana* Bd. X: *Zur Phänomenologie des Inneren Zeitbewusstseins* (1893–1917), hrsg. von Rudolf Boehm, Den Haag: Martinus Nijhoff, 1966.
- Husserl, Edmund. *Husserliana* Bd. XII: *Philosophie der Arithmetik. Mit ergänzenden Texten* (1890–1901), hrsg. von L. Eley, Den Haag: Martinus Nijhoff, 1970.

Husserl, Edmund. *Husserliana Materialien* Bd. VIII: *Späte Texte über Zeitkonstitution* (1929–1934) Die C-Manuskripte, hrsg. von Dieter Lohmar, Dordrecht: Springer, 2006.

Zahavi, Dan. *Husserl's phenomenology*. Stanford, Calif: Stanford University Press, 2003.